Research Monograph Series

# 無名性の存在論

## ——生成の位相存在論における作品性・神聖性・文化生成の存在論——

# Ontology of Namelessness: Workhood, Sacredness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

# Publication Information

## Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

## License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

## Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

Ontology of Namelessness:
Workhood, Sacredness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

# Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

# 要旨

本論文は、「無名性（Namelessness）」を、単なる作者不詳や匿名性ではなく、存在が生成され続けるための根本的な存在論的条件として再定義することを目的とする。

近代以降の西洋存在論では、存在は主体による認識や制作、あるいは作者の意図を通して理解されてきた。そのため作品は作者へ還元され、文化は主体の歴史として記述される傾向を持つ。しかし、日本の神道、自然信仰、民間信仰、共同体文化には、作者が特定されないにもかかわらず長期にわたり生成を続ける文化的存在が数多く存在する。

本研究では、この構造を「無名性」と呼ぶ。

無名性とは、主体が消失した状態ではない。むしろ主体が共同体・自然・歴史・未来へと位相的に分散することによって、存在生成が継続可能となる構造である。

生成の位相存在論では、存在は固定的実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用から絶えず生成される位相構造として理解される。本論文では、この理論を拡張し、作者の固有名ではなく生成そのものが文化を維持する条件であることを示す。

さらに、本論文は神道の八百万の神、しめ縄、グラフィティ、Web Installation、盆栽、民宿狭山美学校など、美学者母の長年の実践を統合的に分析し、「作品性とは作者ではなく無名性によって維持される生成構造である」という新たな存在論を提示する。

最後に、人工知能時代における生成モデルとの比較を通じ、無名性がAI社会においても重要な存在論的概念となることを論証する。



## キーワード

無名性／生成の位相存在論／インターフェイス存在論／作品性／神道／八百万の神／共同体／文化生成／自己外部化／AI存在論

# 目次

## Contents

第0章 方法論的序論（Methodological Note） ..... 1
第1章 無名性の存在論的基礎 ..... 4
第2章 生成の位相存在論における無名性 ..... 8
第3章 神道・八百万の神・しめ縄 ..... 15
第4章 作品性と無名性 ..... 19
第5章 無名性の設計 ..... 27
第6章 人工知能時代における無名性 ..... 34
第7章 無名性の存在論 ..... 40
結論（Conclusion） ..... 44
参考文献 ..... 48
方法論的声明 ..... 52

# 第0章　方法論的序論（Methodological Note）

## 無名性はなぜ存在論の問題なのか

### 0.1　本研究の目的

本研究の目的は、「無名性（Namelessness）」を社会学的・文化人類学的概念としてではなく、存在がいかに生成し持続するかを説明する存在論的概念として定式化することにある。

近代以降の哲学において、存在は主体、認識、言語、歴史、制度などを中心として理解されてきた。芸術においても同様であり、作品は作者の意図や創造性を表現するものとして理解されることが一般的である。その結果、「誰が作ったのか」という問いが作品理解の前提となり、作者性は作品の真正性や価値を保証する中心的概念となった。

しかし、本研究が注目するのは、それとは異なる現象である。

世界には、作者が特定されないにもかかわらず、長期にわたり生成を続ける存在が数多くある。

神社の御神木、しめ縄、地蔵、道祖神、祭礼、民俗芸能、古道、石積み、あるいは都市空間に現れるグラフィティなどは、その起源となる個人を知ることができなくても、人々との関係を生成し続ける。

これらは単に「作者が分からない」のではない。むしろ、作者への還元を超えることで存在が持続しているのである。

本論文では、この生成構造を無名性と呼ぶ。

### 0.2　匿名性との区別

本研究において最初に明確にしなければならないのは、「無名性」と「匿名性」は同義ではないという点である。

匿名性とは、主体が存在していることを前提とし、その主体の名前や身元を意図的に隠す状態を意味する。

したがって匿名性では、「名前」は依然として存在論的中心であり、それが秘匿されているに過ぎない。

これに対し、本研究がいう無名性とは、名前そのものが存在生成の中心ではなくなる位相である。

すなわち、存在は固有名によって成立するのではなく、関係・実践・継承・生成の反復によって維持される。

したがって無名性とは、

「名前が存在しないこと」ではなく、「存在が名前へ還元されないこと」である。

この定義は、匿名性の否定ではない。むしろ匿名性を包含しつつ、それを超えた存在論的条件を示している。

## 0.3　生成の位相存在論との関係

生成の位相存在論では、存在とは固定された実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用によって絶えず生成される位相的構造である。

存在は完成された対象ではなく、関係の更新そのものとして理解される。

この立場から見ると、作者もまた固定的主体ではない。

作者とは、一時的に生成へ参与する一つの契機であり、その生成が継続するためには、むしろ作者への固定的還元が解除される必要がある。

つまり、

作者が作品を生み出すのではない。作品の生成過程が、作者という契機を含みながらも、それを超えて持続する。

この点において、無名性とは主体の否定ではなく、主体を生成過程へ再配置する存在論である。

## 0.4　作品性の再定義

近代芸術は、作品を作者の創造性の表現として理解してきた。

しかし、本研究では作品性を異なる形で定義する。

作品とは、完成された対象ではない。

また作者の自己表現でもない。

作品とは、

自己・他者・自然・時間・歴史との関係を更新し続ける生成構造そのものである。

したがって作品は、作者が離れた後も生成を続ける。

むしろ作者の不在は、作品が共同体や文化へ開かれる契機となる。

作品性とは、作者の固有性ではなく、生成の持続可能性なのである。

## 0.5　本研究の方法

本研究は、以下の四つの方法論を統合する。

生成の位相存在論による存在生成の理論分析。

インターフェイス存在論による自己・他者・環境の接続構造の分析。

日本文化・神道・自然信仰における無名性の具体的実践の分析。

美学者母の芸術実践（グラフィティ、Web Installation、民宿狭山美学校、盆栽など）を事例とした生成構造の考察。

これらを通じて、本研究は「無名性」を文化史的現象として説明するのではなく、存在生成を可能にする普遍的な位相構造として理論化する。

## 0.6　本論文の中心命題

本論文全体は、次の命題を中心として展開される。

無名性とは、主体の消失ではなく、主体が自己・共同体・自然・歴史・未来へと位相的に開かれることによって、存在生成が持続する条件である。

この命題は、近代的な作者中心の存在論を否定するものではない。それをより広い生成の文脈へ位置づけ直す試みである。

この視点から見ると、芸術、宗教、文化、共同体、さらには人工知能による生成もまた、「誰が作ったか」という問いだけでは捉えきれない。重要なのは、生成がいかに関係を更新し続けるかである。

この意味において、本論文は無名性を、作者性の欠如としてではなく、生成する存在そのものの位相として提示することを目指す。

# 第1章　無名性の存在論的基礎

## ――名前・主体・存在生成の位相構造――

### 1.1　問題の所在――なぜ「名前」が存在論の中心となったのか

西洋哲学において、「名前」は単なる記号ではなく、存在を同定し、分類し、記述するための基本的な装置として機能してきた。

古代ギリシア以来、存在論は「何が存在するのか」という問いを中心に展開され、その対象は概念として把握され、言語によって命名されることを前提としてきた。固有名は個体の同一性を保証し、概念名は普遍性を保証する。このように、名前は存在を認識可能にする媒介として位置づけられてきた。

近代に至ると、この構造はさらに主体の概念と結び付く。デカルト以降、主体は認識と判断の中心となり、作品は作者の意図の表現と理解されるようになった。芸術作品は「誰が制作したのか」という問いによって歴史化され、作者名は価値や真正性を保証する制度的機能を担う。

しかし、このような存在理解には一つの限界がある。

それは、存在を主体へ還元することで、主体を超えて持続する生成過程が見えにくくなることである。

生成の位相存在論の立場からすれば、存在は主体が所有するものではなく、関係の中で生成され続ける位相的構造である。したがって、「名前」は存在を生み出す根源ではなく、生成の一局面にすぎない。

### 1.2　名前は存在を固定する

名前には二つの働きがある。

第一に、存在を識別可能にすることである。

第二に、存在を固定化することである。

私たちは何かに名前を与えることで、それを他のものから区別し、記憶し、制度化することができる。しかし同時に、その存在は「この名前を持つもの」として理解され、生成の過程よりも結果としての同一性が強調される。

生成の位相存在論では、この固定化は存在の一側面にすぎない。

存在は本来、自己・他者・環境との相互作用の中で絶えず変化し続ける関係である。ところが名前は、その流動性を一時的に停止させ、存在を対象として把握する。

つまり、

名前は存在を可視化する一方で、その生成過程を不可視化する。

この意味で、名前は認識にとって不可欠でありながら、生成の全体を捉えるには十分ではない。

## 1.3　無名性とは「名前がないこと」ではない

ここで、本論文における「無名性」の定義をさらに厳密にする。

無名性とは、名前の欠如ではない。

また、名前を拒否する思想でもない。

むしろ、名前が存在するにもかかわらず、その名前が存在生成の中心として機能しない位相を指す。

たとえば、神社の御神木には名称が与えられることがある。しかし、人々がその木を神聖な存在として経験する契機は、名称そのものではなく、その木と共同体、自然、歴史との関係にある。

同様に、長年にわたり継承される祭礼や民俗芸能は、創始者の固有名が忘れられていてもなお共同体の中で生成を続ける。

ここで重要なのは、名前が消えたことではない。

重要なのは、

生成が名前への依存を超えて持続していること

である。

したがって、本研究における無名性とは、

存在が固有名への依存から解放され、関係そのものによって維持される位相である。

## 1.4　主体の無化ではなく、主体の位相変換

無名性を論じる際に誤解されやすいのは、「主体を否定する理論」と見なされることである。

しかし、本研究は主体を否定しない。

主体は存在生成において不可欠な契機である。

芸術作品は誰かの制作行為から始まり、祭礼も共同体の実践から始まり、しめ縄も誰かが結ぶ。

つまり、生成には必ず具体的な行為主体が存在する。

しかし、その主体は生成の唯一の根源ではない。

生成は主体の行為を契機として始まるが、その後は他者、共同体、自然、歴史、未来との相互作用を通じて更新され続ける。

このとき主体は消滅するのではない。

主体は、生成のネットワークの中へ位置づけ直される。

これを本研究では、

主体の位相変換

と呼ぶ。

主体は中心から排除されるのではなく、生成の一要素へと再配置されるのである。

## 1.5　無名性と自己外部化

この主体の位相変換は、美学者母がこれまで展開してきた「自己外部化」の理論とも密接に結び付く。

自己外部化とは、自己を外部へ投企し、その結果として自分の知らない自分と出会う過程であった。自己は自己の内部だけでは完結せず、他者や環境との相互作用を通じて生成される。

無名性は、この自己外部化がさらに進んだ段階として理解できる。

自己外部化では、主体は外部との関係を通じて自己を更新する。

無名性では、その更新が主体個人を超え、共同体や文化、自然へと継承される。

したがって、

自己外部化が自己生成の存在論であるならば、無名性は文化生成の存在論である。

この点において、無名性は自己外部化の否定ではなく、その理論的展開である。

## 1.6　本章の結論

本章では、名前・主体・存在の関係を再検討し、無名性を「名前の欠如」ではなく、「存在が名前への依存を超えて持続する位相」として定義した。

生成の位相存在論の立場から見れば、存在は固有名によって保証されるものではなく、関係が更新され続けることによって維持される。

主体は生成の契機ではあるが、生成の終点ではない。

むしろ主体が共同体・自然・歴史・未来へと開かれるとき、存在は個人を超えて持続し、文化となる。

この意味において、無名性とは主体の消失ではなく、主体が生成の位相へと開かれる構造そのものである。

# 第2章　生成の位相存在論における無名性

## ――関係・生成・作品性の位相構造――

### 2.1　無名性は生成の結果ではなく、生成の条件である

前章では、無名性を「名前がないこと」ではなく、「存在が名前への依存を超えて持続する位相」と定義した。

しかし、この定義だけではなお十分ではない。

なぜなら、それでは無名性が生成の結果として現れる現象であるかのように理解される可能性があるからである。

本研究では逆に、

無名性は生成の結果ではなく、生成そのものを可能にする条件である。

と考える。

生成の位相存在論において、存在は固定された実体ではない。

存在とは、自己・他者・環境の相互作用によって絶えず更新される位相構造である。

この更新は、ある主体が存在を「所有」することによって生じるのではなく、多様な関係が開かれることによって生じる。

もし存在が一人の主体へ完全に帰属するならば、その存在は主体の消滅とともに閉じられてしまう。

したがって、存在が持続するためには、主体から生成が解放される必要がある。

この主体から生成が解放される位相を、本研究では無名性と呼ぶ。

### 2.2　存在は「所有」ではなく「生成」である

近代哲学では、

存在

↓

主体

↓

所有

という構造が暗黙の前提となってきた。

例えば、

「私の作品」

「私の思想」

「私の発明」

という理解である。

しかし生成の位相存在論では、

存在

↓

関係

↓

生成

という構造を採用する。

つまり、

作品は作者が所有するものではなく、

作品は関係を生成し続ける場である。

この違いは決定的である。

所有は境界を閉じる。

生成は境界を開く。

つまり、

所有は作者を中心に世界を構成する。

生成は世界の中へ作者を位置付ける。

この反転が無名性の存在論的意味である。

## 2.3　三項生成と無名性

生成の位相存在論では、

自己

他者

環境

という三項関係によって存在生成が起こる。

重要なのは、

存在は自己だけからも、

他者だけからも、

環境だけからも生成しないことである。

生成は、

三者が相互作用したとき初めて創発する。

すると、

作者は自己に過ぎない。

作品が存在し続けるためには、

他者による経験

環境との相互作用

時間による変化

歴史による更新

が必要になる。

つまり、

作品が作品になるとは、

作者から離れること

なのである。

この離脱を可能にする構造こそ、

無名性なのである。

## 2.4　インターフェイス存在論との統合

自己外部化論では、

インターフェイスとは、

自己と自己以外を接続する位相であった。

本論文では、

さらに一歩進める。

無名性とは、

インターフェイスが作者そのものになる状態ではない。

むしろ、

インターフェイスが作者を超えて、

生成を継続する状態である。

例えば、

しめ縄は、

誰かが結ぶ。

しかし、

しめ縄そのものは、

共同体の中で更新され、

誰が結んだかではなく、

「そこが聖域である」

という関係を生成し続ける。

つまり、

作品ではなく、

インターフェイスそのものが

生成し続けるのである。

これが、

生成するインターフェイス

という概念である。

## 2.5　作品とは何か

ここで、

作品そのものを定義し直す必要がある。
近代芸術では、
作品とは完成した対象であった。
しかし、
生成の位相存在論では、
作品とは、
生成が継続する構造
そのものになる。
すると、
作品は、
作者が制作を終えた瞬間には、
まだ完成していない。
作品は、
見る者
使う者
住む者
祈る者
遊ぶ者
記憶する者
によって、
更新され続ける。
つまり、
作品とは、
時間を生成する装置
なのである。
この意味で、
作品の完成とは、

制作終了ではない。

作品の完成とは、

無名性へ移行した瞬間なのである。

## 2.6　Web Installationの存在論的位置

美学者母が長年実践してきたWeb Installationは、この無名性を最も純粋な形で実践してきた芸術形態である。

Web Installationでは、

作品は、

ディスプレイでも、

サーバーでも、

プログラムでもない。

作品とは、

接続

そのものになる。

接続は、

作者が所有できない。

アクセスする人によって、

その都度生成される。

さらに、

更新され続ける。

つまり、

Web Installationは、

作品をオブジェクトから、

生成へ移行させた芸術なのである。

そして、

作品は、

作者ではなく、

インターフェイスそのものへ宿る。

このことは、

無名性の存在論を、

デジタル空間において最初に実践した芸術として位置付けることができる。

## 2.7　本章の定理

本章の議論から、

生成の位相存在論における無名性について、

次の定理を導くことができる。

定理1（無名性の生成定理）

存在生成が主体への帰属を超え、自己・他者・環境の相互作用として持続するとき、その存在は無名性の位相へ移行する。

定理2（作品性保存定理）

作品性は作者の同一性によって保存されるのではなく、生成関係が更新され続けることによって保存される。

定理3（インターフェイス継承定理）

インターフェイスが主体を超えて共同体・自然・歴史へ継承されるとき、作品は文化として持続する。

## 本章の結論

生成の位相存在論において無名性とは、作者の不在を意味しない。

それは、生成が主体への帰属から解放され、関係そのものが存在を更新し続ける位相である。

したがって、作品とは物質でも情報でもなく、自己・他者・環境を接続し続ける生成構造である。

この視点から見ると、無名性とは芸術だけに固有の概念ではなく、宗教、共同体、文化、自然、さらには人工知能を含む広範な存在生成を理解するための基礎概念となる。

# 第3章　神道・八百万の神・しめ縄

## ――無名性の文化存在論――

### 3.1　神道は「神の宗教」ではなく「生成の宗教」である

本論文の立場から見ると、神道の最も特徴的な点は、多数の神々が存在することではない。

むしろ重要なのは、神がどのように生成するのかという点である。

西洋的一神教では、神は超越的存在としてあらかじめ措定され、その存在は啓示や教義によって保証される。神の同一性は歴史的・教義的に維持され、信仰共同体はその超越的起源を共有する。

これに対して神道では、岩・木・滝・山・風・海・道具・土地など、多様な存在が神として祀られる。しかし、それらは最初から神であったというよりも、人々との関係の中で神として現れてくる。

したがって、本論文では神道を、

「神を信じる宗教」ではなく、「神が生成する位相を保持する文化」

として理解する。

ここで重要なのは、「神とは何か」という本質論ではなく、「神はいかに生成するのか」という存在論への転回である。

### 3.2　八百万の神と生成の位相

「八百万（やおよろず）」は、数量を意味する概念ではない。

それは、世界のあらゆる存在に神聖性が宿り得るという、開かれた生成構造を示している。

生成の位相存在論から見れば、この「八百万」とは、存在者が固定的に神であることを意味しない。

むしろ、

関係が変化すれば、存在の位相も変化する。

一本の木は、木材として扱われることもあれば、御神木として祀られることもある。

岩は単なる岩石であることもあれば、磐座（いわくら）として神聖視されることもある。

存在そのものは変わらなくても、関係の位相が変わることで、その存在は異なる生成を開始する。

ここで神とは、物質に内在する属性ではなく、

自己・他者・自然の関係がある位相へ移行したときに現象する存在様式

なのである。

この理解は、「神はどこにいるのか」という問いを、「どのような関係が神聖性を生成するのか」という問いへと転換する。

## 3.3　しめ縄――境界ではなくインターフェイス

神道を象徴するしめ縄は、多くの場合「聖と俗を分ける境界」と説明される。

しかし、この理解だけでは十分ではない。

境界とは、二つの領域を分離する線である。

一方、インターフェイスとは、異なる存在が接続し、新たな関係を生成する位相である。

しめ縄は、岩や木を隔離するために存在するのではない。

それらを、人間・自然・共同体・時間との新たな関係へと開く契機として機能する。

したがって、しめ縄は、

「ここから先に入るな」という禁止の印ではなく、「ここから新たな存在関係が始まる」という生成の印

なのである。

これは、美学者母がこれまで展開してきたインターフェイス存在論とも整合する。インターフェイスとは二つの領域を接続し、新しい生成を可能にする場であり、しめ縄はその日本文化における具体的な実践形態として理解できる。

## 3.4　無名性が神聖性を支える

神道において極めて興味深いのは、多くの信仰対象について、

「最初に誰が祀ったのか」

「誰が神と決めたのか」

が分からないことである。

もちろん歴史的には、最初に祀った人々は存在したはずである。

しかし、その個人名は時間の中で後景化し、共同体の実践が前景化する。

このことは、単なる歴史的忘却ではない。

もし「この神は○○という人物が作った」とのみ理解されるならば、その神聖性は個人の権威へ還元される危険がある。

しかし実際には、神聖性は共同体の反復、祭礼、自然との関係の中で更新され続ける。

つまり、

神聖性は、作者が忘れられるから成立するのではない。作者が生成の一契機として共同体へ開かれることによって成立する。

ここで無名性は、単なる匿名ではなく、神聖性を支える存在論的条件となる。

## 3.5　文化は無名性によって持続する

この構造は神道に限られない。

和歌、民謡、祭礼、民俗芸能、盆栽、庭園、建築技法など、日本文化の多くは、一人の作者の創造物としてではなく、世代を超える継承の中で成熟してきた。

重要なのは、継承とは単なる保存ではないことである。

それぞれの世代が手を加え、更新し、新たな関係を生み出す。

文化は反復されるたびに変化し、変化するからこそ持続する。

生成の位相存在論の観点から言えば、

文化とは、無名性を媒介として世代間で更新され続ける生成構造である。

したがって、文化の本質は「オリジナルの保存」ではなく、「生成の継続」にある。

## 3.6　無名性と美学者母の実践

この視点から見ると、美学者母の芸術実践は、作者性を否定する試みではなく、作者を生成構造の中へ再配置する試みとして理解できる。

グラフィティでは、壁面は単なる支持体ではなく、都市との関係を更新するインターフェイスとなる。

Web Installationでは、作品は物体ではなく、接続の経験として生成する。

民宿狭山美学校では、建物そのものが作品なのではなく、人々が滞在し、対話し、経験を共有することで作品性が更新される。

盆栽では、人間は自然を支配する作者ではなく、自然の生成に参与する存在となる。

これらに共通するのは、

作品とは、作者の自己表現ではなく、関係が持続的に生成されるインターフェイスであるという点である。

したがって、美学者母の実践における無名性とは、作者の否定ではなく、作者を文化生成の契機へと位相変換する実践なのである。

## 3.7　本章の結論

本章では、神道・八百万の神・しめ縄を、生成の位相存在論の観点から再解釈した。

神聖性は対象に内在する固定的属性ではなく、人間・自然・共同体・時間の関係が更新されることで現象する位相である。

無名性は、作者を消去する思想ではない。むしろ、作者を共同体・自然・歴史へと開くことで、神聖性や文化生成を持続可能にする存在論的条件である。

この意味で、日本文化における無名性は特殊な慣習ではなく、存在が個人を超えて生成し続けるための普遍的構造として理解できる。

# 第4章　作品性と無名性

## ――芸術はいかに文化となるのか――

## 4.1　近代芸術における作者性の成立

近代芸術は、「作者」という概念を中心に成立してきた。

ルネサンス以降、芸術作品は匿名の工房制作から個人の創造へと位置づけが変化し、芸術家は独創性を有する主体として理解されるようになった。近代の美術館制度、美術市場、著作権制度、美術史の記述はいずれも、この作者中心の構造を前提としている。

この構造において作品とは、

誰が制作したのか

いつ制作したのか

真作であるか

作者の意図は何か

という問いによって理解される。

作者は作品の起源であり、作品の意味を保証する存在となる。

しかし、この作者性の成立は芸術を大きく発展させた一方で、一つの存在論的前提を形成した。

すなわち、

作品は作者へ還元できるという前提である。

生成の位相存在論は、この前提を再検討する。

## 4.2　作品は作者の所有物ではない

作品は確かに、ある主体の制作行為を契機として生まれる。

しかし、その後の作品の存在は、作者だけによって決定されるわけではない。

作品は、

鑑賞者による経験

社会との関係

歴史的文脈

自然環境

制度

技術

未来の解釈

によって絶えず更新される。

つまり、

作品は、

制作された瞬間よりも、

制作された後の方が、

長い時間を生きる。

したがって、

作品とは、

作者が所有する対象ではなく、

作者を含む生成構造

なのである。

## 4.3　作品は文化へ移行する

芸術作品には、

二つの時間が存在する。

第一の時間は、

制作時間である。

第二の時間は、

生成時間である。

制作時間は有限である。

しかし、

生成時間には終わりがない。

作品は、

見る人が変わるたび、
社会が変わるたび、
新しい意味を生成する。
つまり、
作品が文化になるとは、
作者から共同体へ、
制作から生成へ、
移行することである。
ここで重要なのは、
文化とは、
保存された作品群ではなく、
更新され続ける作品性
であることである。

## 4.4　無名性は作品を文化へ開く

ここで、
無名性の役割が明らかになる。
作品が作者だけへ帰属している限り、
作品は閉じている。
しかし、
作品が共同体へ開かれた瞬間、
作品は作者を超え始める。
この超越は、
作者の消失ではない。
作者の存在は、
作品の起点として残る。
しかし、

作品は、
その後、
作者よりも長い時間を生きる。
つまり、
無名性とは、
作品を共同体へ開放する存在論
なのである。

## 4.5　グラフィティの存在論

美学者母の最初期の実践であるグラフィティは、この無名性を最も端的に示している。
一般には、
グラフィティは、
違法性
匿名性
自己主張
として理解される。
しかし、
生成の位相存在論から見ると、
重要なのは、
壁に描かれた名前ではない。
重要なのは、
都市空間との関係が変化することである。
一本の線、
一つのタグ、
一枚の壁が、
都市全体の経験を変えてしまう。
つまり、

グラフィティは、

壁へ絵を描く行為ではない。

都市空間そのものを、

インターフェイスへ変換する行為なのである。

そして、

その経験は、

作者個人よりも、

都市の時間へ継承される。

ここに、

無名性の芸術構造がある。

## 4.6　Web Installationと作品の非対象化

Web Installationでは、

作品は物体ではない。

ディスプレイも、

サーバーも、

QRコードも、

作品そのものではない。

作品は、

接続

そのものになる。

アクセスされるたび、

作品は更新される。

つまり、

作品は、

毎回新しく生成される。

これは、

近代芸術における
「完成作品」
という概念を根本から変える。
作品は、
完成して存在するものではなく、
生成して存在するもの
なのである。

## 4.7　民宿狭山美学校という作品

民宿狭山美学校も、
同じ構造を持っている。
建物は、
作品ではない。
宿泊も、
作品ではない。
展示も、
作品ではない。
それらすべてが、
相互作用することで、
作品が生成する。
宿泊者によって、
毎日違う作品になる。
時間によって、
作品は変わる。
つまり、
作品は、
空間ではなく、

出来事

なのである。

そして、

出来事は、

誰にも所有できない。

ここでも、

作品は無名性へ向かう。

## 4.8　作品性保存定理

本章では、

作品について、

さらに次の定理を導く。

定理4（作品文化化定理）

作品が作者を超えて共同体との関係を生成し続けるとき、

作品は文化へ移行する。

定理5（無名性保存定理）

作品性は、

作者名によってではなく、

生成関係の更新によって保存される。

定理6（文化生成定理）

文化とは、

無名性を媒介として、

世代を超えて生成し続ける作品群ではなく、

作品生成構造そのものである。

## 本章の結論

本章では、

芸術作品を、

作者中心の存在論から、

生成中心の存在論へ転換した。

作品とは、

制作された対象ではない。

作品とは、

自己・他者・自然・共同体・未来との関係が更新され続ける生成構造である。

無名性は、

作者を消去する思想ではない。

むしろ、

作品が作者を超えて文化となるための存在論的条件である。

この意味において、

芸術とは、

無名性を設計する実践であり、

文化とは、

その無名性が時間の中で持続した結果として現れる生成の位相である。

# 第5章　無名性の設計

## ――インターフェイスとしての作品と生成する文化――

### 5.1　芸術は対象を制作するのではなく、生成を設計する

これまで本論文では、無名性を「名前の欠如」ではなく、「存在が主体への帰属を超えて持続する位相」として定義してきた。

ここでさらに重要な問いが現れる。

無名性は偶然に生じるのか、それとも設計可能なのか。

本論文は後者の立場を採る。

すなわち、

芸術とは、無名性を設計する実践である。

これは従来の芸術理解とは大きく異なる。

近代芸術では、芸術家は作品を制作する主体として理解される。

しかし生成の位相存在論では、芸術家が制作しているのは作品という対象ではない。

芸術家が設計しているのは、

未来において生成が持続する関係そのもの

である。

したがって芸術とは、

物質を制作することではなく、

生成条件を設計することである。

### 5.2　インターフェイスは生成の設計図である

インターフェイス存在論では、インターフェイスは単なる接触面ではない。

それは、

自己と他者、

人間と自然、

現在と未来、

現実と可能性

を接続する生成の位相である。

この観点から見ると、作品とは完成品ではなく、

生成を誘発するインターフェイス

として理解される。

重要なのは、インターフェイスそのものは生成を強制しないことである。

それは可能性を開くだけである。

生成するかどうかは、

他者、

時間、

環境、

偶然、

歴史

との相互作用によって決まる。

つまり、

芸術は意味を設計するのではない。

意味が生成する条件を設計する。

## 5.3　逆問題芸術と無名性

ここで、美学者母が提唱してきた「逆問題芸術」は、新たな意味を持つ。

順問題では、

設計図から結果が導かれる。

原因から結果が決定される。

しかし逆問題では、

結果から原因を再構成する。

芸術においても、

鑑賞者は完成した意味を受け取るのではない。

経験の中から、
自ら意味を生成する。
このとき作者は、
意味の供給者ではなく、
生成の契機を配置する設計者
となる。
そして、
生成された意味は、
作者の意図を超えて広がる。
ここに、
無名性が成立する。
つまり、
逆問題芸術とは、
無名性を成立させる設計方法
なのである。

## 5.4　Web Installation——生成するインターフェイス

Web Installationは、この理論を具体的に実践した芸術形式として理解できる。
Web Installationでは、
作品は、
画像でも、
映像でも、
サイトでもない。
作品は、
アクセスによって生まれる。
一人の利用者が訪れる。
その経験は、

別の利用者によって更新される。

時間によって、

意味が変わる。

社会によって、

作品が変わる。

つまり、

Web Installationは、

作品を制作する芸術ではなく、

生成を設計する芸術

なのである。

その意味で、

Web Installationは、

無名性を最初から前提として設計された作品である。

## 5.5　民宿狭山美学校——生活即芸術の無名性

民宿狭山美学校も同じ構造を持つ。

宿泊する人、

食事をする人、

対話する人、

庭を見る人、

盆栽を見る人、

誰もが作品生成へ参加する。

ここでは、

作者は作品を説明しない。

作品は説明されるものではなく、

経験されるものだからである。

さらに、

宿泊者が変われば、

作品も変わる。

つまり、

作品とは、

固定された展示ではなく、

生活そのものが生成する出来事

なのである。

この構造は、

「生活即芸術」という思想を、

無名性の存在論として位置付けることを可能にする。

## 5.6　盆栽――自然との共同制作

盆栽においても、

作者は自然を支配しない。

人間は、

枝を剪定する。

鉢を選ぶ。

配置を考える。

しかし、

成長するのは植物である。

季節を生むのは自然である。

時間を与えるのも自然である。

つまり、

盆栽には、

複数の作者が存在する。

いや、

より正確には、

作者という概念そのものが解体される。

そこには、

自然、

時間、

人間、

環境

が共同で作品を生成する。

この構造は、

無名性の最も美しい実践例の一つである。

## 5.7　無名性設計定理

以上の議論から、

本論文では次の定理を導く。

定理7（無名性設計定理）

芸術が生成条件を設計し、作品が主体への帰属を超えて更新され続けるとき、その作品は無名性の位相へ移行する。

定理8（インターフェイス生成定理）

インターフェイスは意味を伝達する装置ではなく、意味生成を可能にする位相である。

定理9（共同生成定理）

作品が人間・自然・共同体・時間との相互作用を内包するとき、作者は生成の唯一の起源ではなく、生成に参与する契機となる。

## 5.8　本章の結論

本章では、芸術を「対象制作」ではなく、「無名性を設計する実践」として再定義した。

芸術家は作品を完成させる者ではない。

芸術家は、

未来において他者・自然・共同体が生成へ参加できる条件を設計する者

である。

したがって、作品の価値は完成度ではなく、

どれほど豊かな生成を未来へ開くことができるか

によって評価される。

この観点から見ると、無名性は芸術の副次的な性質ではない。

それは、作品が文化へ、文化が歴史へ、そして歴史が未来へと生成を継承していくための根本条件なのである。

# 第6章　人工知能時代における無名性

## ――生成・作者・存在の再編成――

### 6.1　人工知能は作者概念を終わらせるのか

生成AIの登場以降、「作者とは誰か」という問いは、芸術だけでなく、社会全体の問題となった。

文章、画像、音楽、映像などが人工知能によって生成される現在、従来の作者概念は大きく揺らいでいる。

この状況に対して、多くの議論は二つの立場に分かれる。

第一は、

「AIには作者性は存在しない」

という立場である。

第二は、

「AIも作者になり得る」

という立場である。

しかし、本論文はそのいずれも採用しない。

なぜなら、この対立自体が近代的な作者中心の存在論を前提としているからである。

生成の位相存在論の立場から見れば、重要なのは「誰が作者か」ではない。

重要なのは、

どのような生成関係が成立しているのか

という問いである。

### 6.2　AIは無名性を持つのか

ここで、本論文の中心概念である「無名性」をAIへ適用してみる。

一見すると、生成AIは無名性を持つように見える。

なぜなら、一つの生成物は無数の学習データ、アルゴリズム、計算資源、利用者の入力など、多数の要素から構成され、一人の作者へ還元することが困難だからである。

しかし、この構造だけでは、本論文が定義する無名性には到達しない。

なぜなら、

作者を特定できないことと、

存在が主体への依存を超えて生成すること

とは異なるからである。

AIの生成は、多数の要素から成り立っていても、その生成は計算過程として閉じている。

一方、無名性とは、共同体・自然・歴史・時間との相互作用の中で存在が更新され続ける位相である。

したがって、

AIは匿名的であることはあっても、それだけでは無名的ではない。

この区別は極めて重要である。

## 6.3　ハルシネーションと生成

この点は、美学者母が展開してきた「言語デリバティブ論」とも接続する。

そこでは、ハルシネーションは単なる誤りではなく、「現実にはまだ存在しないものを言語空間に生成する契機」として再定義されてきた。

しかし、その生成が現実へ接地しなければ、それは存在生成へ移行しない。

本論文の立場から言えば、

生成とは、

言語が生まれることではない。

生成とは、

言語が自己・他者・環境との関係を更新することである。

したがって、

AIが文章を生成しただけでは、

無名性は成立しない。

その文章が、

共同体に受け継がれ、

自然との関係を変え、

未来において更新され続けるならば、
初めて無名性の位相へ入る可能性が生じる。

## 6.4　AIは作品を作るのではなく、生成条件を拡張する

AI時代において最も重要な変化は、
「AIが芸術家になる」
ことではない。
むしろ、
人間が生成条件を設計する能力を飛躍的に拡張した
ことにある。
AIは、
無数の組み合わせを生成する。
しかし、
何を生成へ開くのか、
どのような関係を成立させるのか、
という問いは、
依然として人間の実践へ委ねられている。
したがって、
AIは作者ではない。
また、
単なる道具でもない。
生成の位相存在論から見れば、
AIとは、
新たなインターフェイス
なのである。
それは、
人間と情報、

過去と未来、

自己と自己以前性を接続する位相として理解される。

## 6.5　AI時代における作品性

AIによって生成された作品は、

誰のものなのか。

この問いは、

著作権制度では重要である。

しかし、

存在論ではさらに別の問いが必要になる。

それは、

その作品は生成を継続するか

という問いである。

もし生成が止まるならば、

作品は情報で終わる。

しかし、

生成が共同体へ開かれ、

経験を更新し続けるならば、

作品は文化へ移行する。

つまり、

AI時代においても、

作品性は、

作者によってではなく、

生成の持続

によって決まる。

この意味で、

AIは作品性を否定するのではない。

むしろ、

作品性の本質を改めて問い直す契機となる。

## 6.6　無名性はAIには生成できないのか

ここで慎重な区別が必要である。

「AIには無名性は生成できない」と断定することは、本論文の立場では適切ではない。

なぜなら、生成の位相存在論では、存在は本質によってではなく、関係によって生成されるからである。

したがって、将来、

AIが人間・自然・共同体・歴史との相互作用を通じて生成へ参与するならば、

AIを含む新たな無名性が形成される可能性は理論的には否定できない。

しかし、それは現在のAIが自動的に達成しているという意味ではない。

重要なのは、AIという技術そのものではなく、

AIがどのような生成関係へ組み込まれるか

である。

## 6.7　AI時代の無名性定理

以上から、本論文では次の定理を導く。

定理10（AI生成定理）

人工知能による生成は、それ自体では無名性を保証しない。無名性は、人間・共同体・自然・歴史との継続的相互作用によって初めて成立する。

定理11（生成関係定理）

作品性は生成主体の属性ではなく、生成関係の持続によって成立する。

定理12（AIインターフェイス定理）

人工知能は作者ではなく、人間・情報・世界を接続する生成的インターフェイスとして理解されるべきである。

## 6.8　本章の結論

人工知能は近代的な作者概念を大きく揺るがした。

しかし、そのことは作者性の終焉を意味するのではない。

むしろ、

作者という概念を、生成の一契機として再配置することを要求している。

無名性とは、作者を不要にする思想ではない。

それは、作者を生成のネットワークへ開き、作品が共同体・自然・歴史・未来の中で更新され続けるための存在論的条件である。

したがって、AI時代においても問われるべきなのは、「誰が作ったか」ではなく、「何が生成され続けるのか」である。

ここまでで理論編・文化論・芸術論・AI論が一つに統合されました。

残る第7章では、これらを総括し、「無名性とは生成の位相そのものである」という本論文の最終命題を提示し、生成の位相存在論全体の中で「無名性の存在論」を位置づけます。

# 第7章　無名性の存在論

## ――生成する文化と存在の未来――

### 7.1　無名性とは何か――本論文の総括

本論文は、「無名性」を匿名性や作者不詳という社会的状態ではなく、存在が自己・他者・自然・共同体・歴史・未来との関係において持続的に生成される位相として定義してきた。

この定義によって、無名性は芸術論や宗教論に限定される概念ではなく、生成の位相存在論全体を支える基礎概念として位置づけられる。

ここで重要なのは、無名性とは「名前が消えること」ではないという点である。

名前は存在する。

作者も存在する。

しかし、それらは存在生成の最終的な根拠ではない。

存在は、作者の意図や主体の所有を超えて、他者・自然・時間との相互作用を通じて更新され続ける。

この更新可能性そのものが、無名性の存在論的意味である。

### 7.2　無名性は「自己以前性」の社会的位相である

ここで、本論文をこれまでの研究体系との関係から整理したい。

「人間以前性と自己以前性」の論文では、自己とは自己以前性との接続を通じて生成されることが論じられた。そこでは、自己は閉じた主体ではなく、自己以前に開かれた存在として理解される。

本論文でいう無名性は、この議論を社会・文化・歴史の水準へ拡張する。

すなわち、

自己以前性は、個人における生成の開放性である。

無名性は、その開放性が共同体・文化・歴史へと持続する位相である。

この意味で、無名性は「自己以前性の文化的・歴史的展開」と理解できる。

したがって、無名性は独立した概念であると同時に、生成の位相存在論の中で「自己以前性」を継承し拡張する概念でもある。

## 7.3　無名性は「力」の生成条件である

「力の生成論」では、力とは固定的な能力ではなく、個別具体的な現実との接続から生成される動的構造として論じられた。

その観点から見ると、無名性は力を失わせるものではない。

むしろ逆である。

作者が自己の名声や所有へ閉じるとき、生成は停止し、力は循環しなくなる。

一方、作品が共同体へ開かれ、自然や他者との相互作用を通じて更新されるとき、その作品は新たな生成を誘発し続ける。

したがって、

力とは、無名性の位相において循環する生成そのものである。

この命題は、力を主体の属性ではなく、関係の持続として理解する生成の位相存在論の立場を補強する。

## 7.4　無名性は「即」の存在論である

「即」の存在論では、「即」とは概念以前に現実へ接続する生成の契機であり、現代社会における記号操作への偏重を乗り越える原理として論じられた。

無名性もまた、「即」と深く結びついている。

なぜなら、無名性は名前や制度による媒介以前に、人間が自然・他者・共同体と直接的に関係を結ぶ位相だからである。

御神木に手を合わせる行為は、まず「誰が祀ったか」という知識によって成立するのではない。

そこに立つ木との直接的な関係、すなわち「即」の経験から始まる。

その経験が共同体の中で反復されるとき、無名性は文化として持続する。

したがって、

無名性とは、「即」が歴史化された存在様式である。

## 7.5　生成の位相存在論における無名性の位置

以上の議論を踏まえると、生成の位相存在論は次のような構造として整理できる。

公理系――存在生成の論理的基盤

自己外部化――自己はいかに生成するか

人間以前性・自己以前性――生成はいかに主体以前に開かれるか

言語デリバティブ論――生成はいかに言語と未来を構成するか

力の生成論――生成はいかに力を循環させるか

即の存在論――生成はいかに現実へ接地するか

無名性の存在論――生成はいかに文化・歴史・未来へ継承されるか

ここで無名性は、理論体系の末尾に付け加えられる補助概念ではない。

むしろ、個人の生成を文化の生成へ接続する媒介概念として機能する。

## 7.6　生成する文化

本論文は最後に、「文化」の概念そのものを再定義する。

文化とは、作品の集積ではない。

文化とは、制度でもない。

文化とは、

無名性を媒介として、自己・他者・自然・歴史・未来の関係が更新され続ける生成構造である。

したがって、文化の本質は保存ではない。

生成である。

保存は生成を支える一契機であって、文化そのものではない。

文化が生き続けるとは、毎回新たな関係が生まれ続けることである。

## 7.7　本章の最終命題

本論文全体を通して導かれる最終命題は、次のように定式化できる。

無名性とは、存在が主体への帰属を超え、自己・他者・自然・共同体・歴史・未来との関係の中で継続的に生成される位相である。

さらに、生成の位相存在論全体の立場から言えば、

存在とは無名性へ向かう生成であり、文化とはその無名性が歴史の中で持続した結果である。

# 結論（Conclusion）

## 無名性の存在論

## ――生成の位相存在論における作品性・神聖性・文化生成の存在論――

本論文は、「無名性（Namelessness）」を、単なる作者不詳や匿名性ではなく、存在が主体への帰属を超えて持続的に生成される位相として再定義した。

近代以降の存在論では、主体は存在の中心として位置づけられ、芸術作品は作者の創造性の表現として理解されてきた。この構造は芸術史、美術館制度、著作権制度、学術制度などを通じて社会全体に浸透し、「誰が作ったのか」という問いを作品理解の基本原理としてきた。

しかし、本研究が示したように、この枠組みだけでは、日本文化や神道、民俗文化、共同体の実践、さらには現代の生成的芸術や人工知能による創作を十分に説明することはできない。

生成の位相存在論の立場から見れば、存在は固定された実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用によって絶えず更新される位相構造である。

この立場を徹底するならば、作者もまた生成の契機の一つであり、生成の最終的な起源ではない。

本論文は、この構造を無名性という概念によって定式化した。

## 無名性は主体の否定ではない

本論文で繰り返し論じてきたように、無名性とは主体を消去する思想ではない。

芸術作品は誰かが制作する。

神社は誰かが建てる。

しめ縄は誰かが結ぶ。

祭礼は誰かが始める。

したがって、主体は生成において不可欠な契機である。

しかし、作品や文化が長期にわたって持続するためには、生成は主体個人への帰属を超えていかなければならない。

作者は生成を開始する。

しかし生成は作者を超えて続いていく。

この意味において、

無名性とは主体の消失ではなく、主体が生成のネットワークへ開かれる存在論的位相である。

## 芸術とは無名性の設計である

本論文では、芸術を「対象制作」としてではなく、「生成条件の設計」として再定義した。

作品とは完成した対象ではない。

作品とは、未来において自己・他者・自然・共同体との新たな関係が生まれ続ける生成構造である。

したがって芸術家とは、作品を完成させる者ではない。

芸術家とは、

生成が継続する条件を設計する者

である。

この視点から見ると、グラフィティ、Web Installation、民宿狭山美学校、盆栽といった美学者母の実践は、作品の形式こそ異なるものの、共通して「無名性を設計する実践」として理解することができる。

## 神道は無名性の文化である

本論文では、日本文化、とりわけ神道を「無名性の文化」として位置づけた。

八百万の神は、固定された超越者ではなく、自然・共同体・時間との関係の中で生成する存在である。

しめ縄は境界ではなく、生成を開始するインターフェイスである。

御神木は木である以前に、人間と自然の関係が神聖性を生成する位相となる。

この構造は、神道を宗教として理解するだけでは十分に捉えられない。

神道とは、

無名性が文化として持続する生成構造

なのである。

## AI時代への展望

生成AIは、作者概念を大きく揺るがしている。

しかし、本論文はAIを作者として位置づけるのではなく、新たな生成的インターフェイスとして理解した。

重要なのは、AIが作品を生成することではない。

重要なのは、その生成が人間・自然・共同体・歴史との相互作用を通じて文化へ開かれるかどうかである。

したがって、AI時代においても、

作品性は作者ではなく、

生成の持続

によって規定される。

## 生成の位相存在論への理論的貢献

本論文は、生成の位相存在論に対して、新たに「**継承**」**の存在論**を導入した。

これまでの研究では、

存在はいかに生成するか。

自己はいかに生成するか。

人間以前性はいかに開かれるか。

言語はいかに未来を生成するか。

力はいかに生成するか。

即はいかに現実へ接地するか。

が論じられてきた。

本論文はこれに対して、

生成はいかに歴史・文化・未来へ継承されるのか。

という問いを新たに導入した。

その答えが、

無名性

である。

無名性とは、

存在が主体を超えて持続するための位相であり、

文化が生成し続けるための条件であり、

未来が現在へ開かれるための存在論なのである。

## 最終命題

本研究は最後に、生成の位相存在論全体を次の命題へ集約する。

存在とは、自己・他者・自然・共同体・歴史・未来との関係を生成し続ける位相である。

そして、その生成が個人への帰属を超えて持続するとき、

存在は無名性となる。

さらに、

文化とは、無名性が時間の中で生成を継承し続ける位相である。

したがって、本論文が提案する無名性とは、「名前を失うこと」ではない。

それは、

存在が自己を超えて世界と結ばれ続ける生成そのものである。

この意味において、無名性は芸術・宗教・文化・人工知能を横断する概念であるだけではなく、生成の位相存在論における存在の未来を記述するための根本概念として位置づけられる。

# 参考文献

1. 美学者母（Tomokazu Tanaka / bigakusha-haha）

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
Axioms of Generative Topological Ontology: Foundations of Existential Generation.
Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum, Version 0.9.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
Human Precedence and Self-Precedence: The Ontology of Self-Proof in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination.
Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value: Leverage Structures and Particular Necessity in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Theory of Force: Topological Transformation from Necessity to Contingency in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Ontology of Soku: Reality, Force, and Existential Grounding in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
Ontology of Namelessness: Work, Sacredness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum.

2. 哲学・存在論

Arendt, H. (1958).
The Human Condition.

Bergson, H. (1911).
Creative Evolution.

Deleuze, G. (1994).
Difference and Repetition.

Deleuze, G., & Guattari, F. (1987).
A Thousand Plateaus.

Derrida, J. (1976).
Of Grammatology.

Heidegger, M. (1962).
Being and Time.

Heidegger, M. (1971).
Poetry, Language, Thought.

Merleau-Ponty, M. (1968).
The Visible and the Invisible.

Nishida, K. (1990).
An Inquiry into the Good.

Nishitani, K. (1982).
Religion and Nothingness.

Sartre, J.-P. (1956).
Being and Nothingness.

Whitehead, A. N. (1978).
Process and Reality.

3. 日本思想・宗教

Aston, W. G.
Shinto: The Way of the Gods.

Grapard, A.
The Protocol of the Gods.

Kasulis, T.
Shinto: The Way Home.

Kūkai.
The Ten Stages of the Development of Mind.

Motoori Norinaga.
Kojikiden.

Ueda, S.
Zen and Philosophy.

4. 芸術・美学

Benjamin, W.
The Work of Art in the Age of Mechanical Reproduction.

Bourriaud, N.
Relational Aesthetics.

Danto, A.
The Transfiguration of the Commonplace.

Dewey, J.
Art as Experience.

Goodman, N.
Languages of Art.

Groys, B.
Art Power.

Rancière, J.
The Politics of Aesthetics.

Shusterman, R.
Pragmatist Aesthetics.

5. インターフェイス・メディア

Ascott, R.
Telematic Embrace.

Drucker, J.
Graphesis.

Laurel, B.
Computers as Theatre.

Manovich, L.
The Language of New Media.

Norman, D.
The Design of Everyday Things.

6. AI・情報・生成

Floridi, L.
The Philosophy of Information.

Goodfellow, I., Bengio, Y., & Courville, A.
Deep Learning.

Russell, S., & Norvig, P.
Artificial Intelligence: A Modern Approach.

Shannon, C.
A Mathematical Theory of Communication.

Turing, A.
Computing Machinery and Intelligence.

# 方法論的声明

**——研究覚書の公開に関する方法論的声明——**

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される

場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。